

『遁世述懷抄』所収漢詩について

仁 木 夏 実

はじめに

鎌倉時代中期東大寺を代表する学僧に宗性(一二〇二—一二七八)がいる。藤原北家長良流の隆兼を父として出生し、十三歳で入寺した後は主に尊勝院に居住、数多くの書写・抄出作業を行ったことで知られる。東大寺図書館には彼の自筆にかかる史料が多く現存するが、その中心は『俱舍論』や『華嚴経探玄記』をはじめとする内典の抄出や各種法会の問答記、高僧伝の要文集など、教学研究に関わるものである。有名な『春華秋月抄』や『白氏文集要文抄』など直接内典とは関わらないものもまた、そうした法会で用いられる表白や願文製作のための要句の抄出であり、いったいに宗性自筆史料には公請

法会にに応じて僧綱昇進を目指す修学のためのものという側面が強い。

そうした中に、宗性が天福二年(一二三四)に編んだ『遁世述懷抄』という卷子一軸がある。書名に「抄」と付くためか、これまでは他の膨大な修学のための抄出書に紛れ、取り立てて言及されることもなかったが、これは宗性が折に触れて書写した書状と漢詩をまとめたものである。稿者はかつてこの『遁世述懷抄』所収の「信阿」という作者名を持つ漢詩二首を取り上げて考察し、この「信阿」が『和漢朗詠私注』や『新樂府略意』などを著し、『平家物語』にその活躍が語られる信救(和漢朗詠私注)では信阿、木曾義仲の右筆としては寛明と名乗っている)でないかと推定した^②。小稿は『遁世述懷抄』所収

の漢詩のうち、すでに発表した信阿詩を除く三首を紹介するものである。なお、残る散文については別稿を期している。

一 『遁世述懐抄』の構成

まず、本書『遁世述懐抄』の全体の構成について簡単にまとめておこう。各文書には小稿での通称として私に題と作品番号を付し、また、「」内に執筆年時と書写年時を示した。

●所収文書「執筆年時／書写年時」

○表紙（第一紙）

①実禅書状（第二～六紙）

〔建暦三（二二二三）・三・二十四／

建保四（二二二六）六・十一〕

②解脱房貞慶書状（第七・八紙）

〔建久三（二二九二）頃／

建保三（二二二五）・七・四〕

③藤懇真七言十韻

④信阿「出家述懐矣」詩

⑤信阿「讚于中才子詩」（以上第九・十紙）

⑥塵巷隱「無題」詩（第十一・十二紙）

〔未詳／承久三（二二二二）四・十九〕

⑦藤原基良「春日社壇述懐詩」（第十三紙）

〔建暦三（二二二三）・正月下旬／

建保七（二二二九）・四・十五〕

⑧藤原師長書状（第十四紙）

〔保元元（一一五六）・七・三十／未詳〕

○卷末奥書（第十五紙）

〔天福二（二二三四）・九月下旬〕

卷末の奥書は以下の通りである。

天福二年九月下旬於東大寺中院結集之畢

散在之書披見有煩故也後覽之輩可哀其志矣

華嚴宗末学大法師宗性記之

すなわち、数度に亘って書写していた漢詩と書状を後年になって宗性自身がまとめたものと知られる。

③、④、⑤は個々の書写奥書を持たないが、これらは第九紙から⑥塵巷隱「無題」詩の書かれている第十一紙にかけて連続して書かれており、文字も類似していることから、⑥塵巷隱「無題」詩と同時の書写であり、⑥の後に見える書写奥書「承久三年四月十九日（酉時）於東大寺中院／書写之了／右筆宗性大法師／同日（戌時）一交了」は、③から⑥の漢詩四首を書写した際に付けられ

たものと思われる。

第二紙から第八紙にかけてと、第十四紙には右大弁宗行書状など八枚の紙背文書があり、堀池春峰氏『東大寺遺文』第八巻はこの紙背文書、そして各文書の奥書と、所収される貞慶の書状の翻刻を載せる。このほか宗性の詳細な年譜研究である平岡定海氏の『東大寺宗性上人之研究並史料』^④、また『宗性・凝然写本目録』^⑤においても、無論『遁世述懐抄』は紹介されているが、挙げられているのは各文書の奥書のみである。したがって、本書自体の紹介は、『東大寺遺文』に挙げられた貞慶の書状と、稿者が以前紹介した信阿詩二首を除き、これまでほとんど行われていない。

書写年時不明の⑧藤原師長書状を除けば、文書の書写は、最も早いもので建保三年、最も遅いものでも承久三年、宗性が東大寺に入寺して二年目の十四歳から、八年目の十九歳にかけての時期にあたることとなり、現在知られる史料のなかでも宗性の最も若い時期の書写活動を示している。それから十数年経過した天福二年に何故これらの文書がまたられたのか、という点について巻末の奥書は「散在の書、披見に煩ひ有るの故なり」というばかりであり、詳細は不明である。

二 藤懇真七言十韻

項目、以謫被罷廳衙、蟄居之中、為休愁腸呈七言十韻、便寄諸知己

左金吾衛長史藤懇真

項目、謫を以て廳衙を罷せられ、蟄居の中、愁腸を休めんが為に七言十韻を呈し、便ち諸知己に寄す

左金吾衛長史藤懇真

1 半百齡闌奈役何

半百の齡闌^たけて役を奈^{いかん}せん

2 臨淵履薄陷風波

淵に臨み薄きを履みて風波に陷る

3 勤疎棘暑被停職

勤めは疎にして棘署^⑥に職を停められ

4 學拙李曹難謝科

學は拙くして李曹^{とが}に科を謝し難し

5 雄釵辞腰横壁上

雄釵は腰を辞して壁上に横たへ

6 豸冠厭首掛牆阿

豸^{たぐわん}冠は首を厭ひて牆阿に掛く

7 第蘆獲落結蛛網

第蘆は獲落として蛛網を結び

8 柴戸蕭條張雀羅

柴戸は蕭條として雀羅を張る

9 室有妻兒霑雨臥

室に妻兒有り雨に霑^{つぐ}ひて臥し

10 厨無煙火見雲過

厨に煙火無く雲を見て過ぐ

11 欲干寸祿餘年少
寸祿を干めんとするも餘年少な

く

12 未慰端憂暇日多
未だ端憂を慰めずして暇日多し

13 元亮空歸栽晉柳
元亮は空しく歸りて晉柳を栽へ

14 伯夷長去忌周禾
伯夷は長く去りて周禾を忌む

15 不唯今世忍貧路
唯だ今世に貧路を忍ぶのみにあ

らず

16 亦恐來生溺愛河
亦た恐る來生に愛河に溺れむこ

とを

17 佛界望深三藏教
佛界の望みは深し三藏の教へ

18 帝京跡僻五噫歌
帝京の跡を僻れり五噫の歌

19 榮華如夢誰能保
榮華は夢の如し誰か能く保たん

遮 莫放遊して釋迦に礼せん

さきに掲げた書写奥書が書写の状況を述べるだけのこ

く簡単なものであるから、作詩の契機、作者などについては作品自体から考えるよりほかない。

まず詩題から見てゆく。

「項日、謫を以て廳衛を罷せられ、塾居の中、愁腸を休めんが為に七言十韻を呈し、便ち諸知己に寄す」

問題となるのは「以謫」の解釈であろう。単に、とが

められて、とするか、遠方へ追放されることとなって、とするか大きく二通りの取り方が考えられるが、詩題からだけでは判断が困難である。詩の内容を見た上で再考することとしたい。どちらにせよ罪に問われた作者は勤

めを解かれ自宅に籠もっており、その愁いを慰めるためにこの七言十韻を作り、知人に送ったという。七言十韻という形式は比較的珍しいが、『本朝無題詩』には十六首が収録されている。十韻に限らず排律が多いのは同時代詩の特徴の一つであり、この詩の製作時期が『本朝無題詩』の時代や書写された承久三年からさほど離れていないのではないかと推測する一つの根拠となる。

さて、作者は自らを「左金吾衛長史藤懇真」と名乗る。金吾は衛門府、長史は尉の唐名であるから、官は左衛門尉でよいが、作者である藤原懇真なる人物については管見のところ合致する人物を未だ見いだし得ていない。学生の字、偽名などの可能性を含めて検索を続けなければならぬが、詩の内容からも作者の経歴などについて知りうる点があるので、確認しておきたい。まず第一聯に「半百の齡闈けて役を奈何せん 測に臨み薄きを履みて風波に陥る」とあることから、作者の年齢が五十近くであり、薄氷を履むに等しい危険を冒した結果、風波に喩

えられるような争いごとに巻き込まれたことが分かる。

そして、続く第二聯には「勤めは疎にして棘署に職を停められ 學は拙くして李曹に科を謝し難し」とあり、「棘署」が日本では検非違使を指し、「李曹」が大学を指すと考えられることから、この人物は検非違使と左衛門尉とを兼任する大学寮出身者ということとなる。「李曹」は用例の少ない語であるが、中原(大江)広元「請殊蒙天恩罷罷所帯左衛門尉検非違使状」(『吾妻鏡』卷十二・建久三年三月二日条)に、

右広元去年四月一日任明法博士左衛門大尉。即蒙檢非違使宣旨。三箇之恩、一所不耐。是以同十一月五日。先遁李曹之儒職、愍居棘署之法官。

とあるのが参考となる。⑧ここでの「李曹之儒職」とは明法博士であり、李曹は明法道ということになるが、良く知られている通り、この時期の明法道がほぼ中原家と坂上家の出身者によって独占されていたことを思えば、「藤懇真」が明法道出身者であるとは考えにくく、紀伝道出身とするのが妥当であろう。

宮崎康充氏によれば検非違使尉にはその性格の違いにより四つに大別され、紀伝道出身の左右衛門尉から任用される者は更に藏人を兼ねることが多く、「藏人尉」や

「上の判官」と呼ばれてほぼ常時在職していたという。⑨

その他の検非違使尉が、明法道出身者、実際の警察活動に関わり、多くは源氏、平氏から登用される「追捕尉」、そして使庁の雑事に従事する「非成業検非違使」の三種であったことを考えるならば、この藤原懇真はこれらのうち「藏人尉」であった可能性が高い。

第三聯「雄劔は腰を辞して壁上に横たへ 多冠は首を厭ひて牆阿に掛く」

劔を腰より外して壁に横たえ、冠は私の頭を嫌う(か)のようであるから)、かきねに掛けておく。

武官である検非違使尉を罷免されたことを言う。「筆海要津」⑩卷下・検非違使の項には次のような類例が挙げられている。

謬稟庸隙之性、猥忝刑辟之官。

戴多冠而鬢已衰、漸理秋霜之千茎。

横鳳劔而腰空疲、愍帶曉水之三尺。

第四聯「第蘆は獲落として蛛網を結び 柴戸は蕭條として雀羅を張る」

第五聯「室に妻兒有り雨に霑ひて臥し 厨に煙火無く雲を見て過ぐ」

ともに生活の貧しさを言う。「結蛛網」と「張雀羅」

は家屋の寂しい形容。

荒廢した住まいの内では妻子が雨に濡れながら寝ている。厨には食事の支度をする煙もなく（私は為すすべもなく）雲を見て日を過ごしている。

第六聯「寸禄を干めんとするも餘年少なく 未だ端憂を慰めずして暇日多し」

僅かな俸禄を求めようとは思うが余生は短い。いまだ氣も紛れず何事も手に付かない日を送っている。

第十一句は勿論『論語』為政篇「子張学干禄」に基づいており、第十二句は謝莊「月賦」（『文選』卷十三）の

「陳王初喪応劉、端然憂愁、以多閑暇。」を踏まえていると思われる。続く第七聯「元亮は空しく歸りて晉柳を栽へ 伯夷は長く去りて周禾を忌む」では元亮と伯夷と

いう二人の著名な人物が引き合いに出され、句題詩で言えば腰句、すなわち多く典故に基づいた表現が求められる部分に当たろうが、この第六聯もまたはつきりと名を

挙げるわけではないが、子張、陳王（曹植）をあやまらず想起させる典拠を有している。

元亮は陶淵明の字（名とする説もある）。「五斗米の為に腰を折ること能はず」と喝破して官をなげうち帰郷、自宅前に柳を植え、五柳先生と称して隠居したことは有名

であり、王朝人の一つの憧れであった。伯夷は殷の孤竹君の子。弟の叔斉と王位を譲り合つて国を出、周に身を寄せたが、周の武王が殷を討とうとしたのをいさめて聞かれなかつたので首陽山に隠れ、周の食物を拒んで餓死したという。いずれも節を守つて隠れた人物に我が身を重ねる。「薄きを履」んで罪に問われている身ではあるが、彼にとつてそれは決して不名誉なことではなく節を守つた結果と認識されているのである。

第八聯以降、詩は仏教的な色彩を濃くする。

「唯だ今世に貧路を忍ぶのみにあらず 亦た恐る来生に愛河に溺れむことを

佛界の望みは深し三蔵の教へ 帝京の跡を僻れり五噫の歌

榮華は夢の如し誰か能く保たん 遮莫 放遊して釋迦に礼せん」

今生の貧苦だけでなく、来世で再び愛欲に溺れることを怖れ、仏の教えにすぎり、「五噫の歌」を歌いつつ都を遠く離れようと言う。「五噫の歌」とは五つの「噫」（嘆息の声）を用いて人間の悲嘆を詠じた歌。『後漢書』卷

八十三、梁鴻伝が伝えるところによれば、梁鴻が洛陽を訪れた際に詠じ、肅宗はこれを非としたものの、ついに

梁鴻は捕らえられなかつたという。そして、世の栄華の移ろいやすさに、ままよ、さまよひ歩いて仏に仕えよう、と詩は結ばれる。ここで想起されるのが、詩題の「以謫」の解釈である。自ら官を棄てて帰郷した陶淵明、帝位を逃れて山に隠れた伯夷に自分をなぞらえ、さらに「五噫の歌」の故事を引いて都を離れようと述べるこの作者が流罪になつたとは考えにくく、単に罪に問われて蟄居中であるとすべきであろう。

三 塵巷隱「無題」詩

塵巷隱

- | | |
|-----------|-------------------|
| 1 天下安寧人有樂 | 天下安寧にして人に樂有り |
| 2 為之定識不堅閑 | 之が為に定めて識る閑の堅からざるを |
| 3 千秋寫影崐明水 | 千秋影を寫す崐明の水 |
| 4 万歳傳聲姑射山 | 万歳聲を傳ふ姑射の山 |
| 5 斜日籠林松色薄 | 斜日林に籠りて松色薄し |
| 6 平砂滿地鶴眠閑 | 平砂地に満ちて鶴眠閑かなり |
| 7 晚望不極風煙底 | 晚望は極まらず風煙の底 |
| 8 宿運可迷木鴈間 | 宿運は迷ふべし木鴈の間 |
| 9 回廊如馳争得駐 | 回廊は馳せるが如し争か駐まる |

10 一生易過未能還（上下句同意歎）
ことを得んや
一生は過ぎ易し未だ還ること能はず（上下の句同意か）

11 今逢知己雖同志
今知己に逢ひて志を同じうすと雖も

12 憶老獨慙作散班
老いを憶ひて獨り慙ず散班と作ることを

詩題が欠けているが、内容から見て前に書かれた⑤「讀于中才子詩」に続くものではなく、宗性の書写の段階ですでに失われていたと考えるべきものである。ここでは仮に「無題」詩としておく。作者「塵巷隱」については未詳。「朝市隱」という語があるが、^①それと同様に俗界にある隱者ということであろう。第十二句に「老いを憶ひて獨り慙ず散班と作ることを」とあり、老いて散位となつたことが述べられていることから明らかであるし、第一聯「天下安寧にして人に樂有り 之が為に定めて識る閑の堅からざるを」、平穩な社会の様子に閑所の取り締まりもゆるやかであろうとする判断や、第二聯「千秋影を寫す崐明の水 万歳聲を傳ふ姑射の山」、漢

の武帝が昆明国討伐のために水軍の練習をしたという昆明池（に喩えられる池）は千年もの長きにわたって（湖面を乱すことなく）物影を映し出し、仙人の住むという姑射山（のような山）からは長久を祝う万歳の声が聞こえてくる（万歳の声のような風が吹いてくる）、という発想、漢武帝の故事に発する「崑明水」（「崑」は「昆」に通じ）や院御所の比喻として用いられることも多い「姑射山」といった語の選択も、俗世との関わりを断った人物のそれとは考えにくい。^⑩

第三聯で述べられるのは今身を置く風景の趣である。

「斜日林に籠りて松色薄し 平砂地に満ちて鶴眠閑かなり」、夕日が林の中に差し込んできて松の色も明るくぼんやりとしており、地には砂が敷き詰められそこでは鶴が静かに眠っている、という情景は「本朝無題詩」^⑪などで愛好された山寺の描写などに類似した表現がある。際立った特色を持つものではないが、ここまでの三聯の眼目は天下、山水、そしてさらに身近な風景と三段階に亘って繰り返し「安寧」が語られるところにある。次第に視界を狭めてゆき、その流れをさらに進めるかたちで第四聯から自身の内省に入る、という構成は巧みである。

しかし、作者の心中は周囲の安寧とは程遠い。

第四聯「晚望は極まらず風煙の底 宿運は迷ふべし木鴈の間」。「晚望」とは通常夕方の景色を言うが、見通しが効かないのは風や霧に遮られた景色だけではないだろう。定められた運命もまた、「木鴈の間」に到ろうと惑い続けているのである。「木鴈の間」とは、『莊子』に語られる寓話に基づく言葉。木には役立つ所のあるものが伐られ、役に立たないものがかえって繁茂するということがあり、反対に鴈にはよく鳴くものが生きながらえ、鳴かないものが殺されるように、災いを避けるには有能と無能の中間に居るのが最も良いという意味で用いられる。しかし、その「木鴈の間」という処世の道に行き着くことすら困難を伴うのである。そして、その迷いは続く第五聯「回廊は馳せるが如し争か駐まることを得んや 一生は過ぎ易し未だ還ること能はず」、決して留まることない時の流れへの感慨へとつながってゆく。それは第十一句「今知己に逢ひて志を同じうすと雖も」、友人と志を共にしていても、第十二句「老いを憶ひて獨り慙ず 散班と作ることを」、歳長けてなおも散位にある自分の境遇を恥じるという、孤独感となって作者を苛むのである。

四 藤原基良「春日社壇述懐詩」

春日結 春日社壇述懐詩 先仙韻

銀青光祿大夫基

- 1 遅々春日社壇邊 遅々たる春日社壇の邊
- 2 暮齋早成欽仰專 暮齋^⑩早く成りて欽仰專^{もっぱ}らなり
- 3 皇澤由来随貴賤 皇澤は由来貴賤に随ひ
- 4 神恩縁底有頗編 神恩は底に縁^{なだ}つてか頗編^よ有らん
- 5 且千怨積二句後 且千^{しよせん}の怨は積る二句の後
- 6 沈陸涙餘雙袖前 沈陸の涙は餘る雙袖の前
- 7 唯願和光照照見 唯願はくは和光照照見を垂れさせ
たまへ
- 8 微官空散歎終年 微官空散として終年を歎く

【書写奥書】

今此詩者、建曆三年正月下旬之比、尊勝院／僧都御坊、春日御社御參籠之時、或俗／作此詩置籠門丑寅之角。而／此人下向之後、僧都御坊取寄翰墨、於／籠門之前書寫之了。于時作者不知／誰人。後尋之、忠良大納言殿御子三位中／将基良云々／

建保七年四月十五日〔巳時〕於東大寺中院／書寫之了

花嚴宗沙門宗性 生年十八 夏臘六廻

今此の詩は、建曆三年（二二二三）正月下旬の比、

尊勝院僧都御坊、春日御社御參籠の時、或俗此の詩を作りて籠門の丑寅の角に置く。しかるに此の人下

向の後、僧都御坊翰墨を取り寄せて、籠門の前にて

これを書寫し了んぬ。時に作者誰人なるかを知らず。

後にこれを尋ぬるに、忠良大納言殿の御子、三位中

将基良なり云々。建保七年（二二一九）四月十五日

〔巳時〕東大寺中院においてこれを書寫し了んぬ。

花嚴宗沙門宗性 生年十八 夏臘六廻

冒頭に「春日結」とあるが、これは「春日社」の書き損じと思われるので、以下の考察では省略する。

この詩については比較的詳しい書写奥書が付せられており、作者「銀青光祿大夫基」の素性を含めた作詩の状況が明らかである。

すなわち、この詩は建曆三年（二二二三）正月下旬頃、

ある俗人が春日社の籠門^⑩に詩を書き置いたものを參籠していた尊勝院僧都が書寫したもので、その時にはその俗人が誰であるのか分からなかったが、後に調べてみると

大納言藤原忠良息、三位中将基良であったという。尊勝院僧都は宗性の師であった当時の尊勝院院主道性^{①⑦}であろう。入寺以前の出来事ではあるが、宗性の身近で起こり、当時はよく知られた逸話であったと思われる。

作者の藤原基良（一一八六～一二七六）は忠良の長男。

母は正二位権大納言藤原美国の女。建久八年（一一九七）に元服、従五位下に叙せられ、左少将、左中将を経て建暦三年正月には二十八歳、散位従三位であった。その基良が氏社である春日社に書き置いた詩とは一体どのようなものであったのだろうか。内容を見ていこう。

第一聯「遅々たる春日社壇の邊 暮賽早く成りて欽仰 専らなり」

春の日の長さを「遅々」と表現することは早く『詩経』から見られる。白居易新樂府「驪宮高」にも「和漢朗詠集」に収められて人口に膾炙した「遅々兮春日、玉鬢暖兮温泉溢。」の句があり、平安時代の漢詩文にもしばしば取り入れられていて、発想自体はそれほど目新しいものではないが、ここでの工夫は「春の日」と「春日社」とが掛けられている点であろう。「遅々」によって自然に引き出された「春日」は「社壇」に続くことによって「春の日」と「春日社」との二重の意味を響かせ

ることとなるのである。後に例を挙げるが、「春の日」と「春日社」を掛けるという発想は和歌に多く見られ、本詩の工夫もそこから学ばれたものと考えられる。

第二聯「皇澤は由来貴賤に随ひ 神恩は底に縁つてか 頗偏有らん」

帝の恩恵はもとより身分の高低によるが、神のいつくしみにはどうして偏りがあるか（いや、身分に関わらず平等に与えられるのである）。

「縁底」左傍に「ナニヨツテカ」と訓みの注記が付されている。

第三聯「且千の怨は積る二句の後 沈陸の涙は餘る雙袖の前」

二十（年の月日）を経て怨みは数多く積み重なり、人の世に埋もれている憂いの涙に両袖もひどく濡れそぼつのである。

「且千」は数量の多いさまを言う。観智院本『類聚名義抄』（佛上四十四ウ）に「チチハカリ」の訓が付せられている。「沈陸」は「陸沈」と同じく、人が世の中に埋もれていることと思われる。「陸沈」に比べて用例は少ないが、この詩と同時代の『猪隈関白記紙背詩懷紙』には「詩筵独泥浅才士、沈陸愁深未発栄」（平親輔「冬日同

賦雪飛敷澤中。各分一字詩（探得清字）のような例が散見される。①「且千」の対としてみると、六に通じる「陸」が「千」の対となっており、対語としての意識は払われている。

第四聯「唯願はくは和光照見を垂れさせたまへ 微官空散として終年を歎く」

ただ願わくは神よ私に真実の教えを示したまえ。（私）取るに足らない官にあり人生を歎いている。

要するに、天皇の恵みの乏しい我が身を嘆き、氏神である春日の神の加護を依り頼むという内容である。このような不遇感を基良が露わにしたのは何故か。この直前の除目に注目すると、基良は昇進しなかったものの、異母弟である家良（一一九二―一二六四）が右中將に加えて備中権守に任じられていることが分かる（『公卿補任』）。あるいはこのことが作詩の原因の一つとなったのではないだろうか。家良は忠良の次男。正二位権大納言藤原定能の女を母とし、基良に遅れること三年の正治二年（一二〇〇）に叙爵されて後、順調に昇進を続けていた。二人はともに若くして藤原定家の門弟となり、後鳥羽院・順徳天皇の歌壇に参加していたが、後年『新撰六帖題和歌』を主催し、『万代和歌集』『続古今和歌集』の編纂な

ども関わった家良の方が歌人としての評価は高かったらしく、それも作用してか昇進においても基良は家良に圧倒されつつあった。建暦元年（一一二二）、ともに従三位となり、基良と肩を並べた家良の任備中権守が基良に与えた衝撃は決して小さくはなかったのではないだろうか。基良が春日社に参詣して我が身の不遇を嘆いていた丁度その頃、家良は後鳥羽上皇の法勝寺修正会御幸の供奉（『明月記』建保元年正月十三日条）、宮中踏歌節会への参加（『同』同月十六日条）など官人として多忙な日々を過ごしており、その両者のコントラストが本詩第三句のような、やや激しい表現に投影されているように思われるのである。

藤原氏の氏神である春日社に、氏全体の、そして氏人である自らの繁栄を祈願するのはこの時代広く見られる発想である。これより後年になるが寛喜三年（一一三二）、藤原定家は老体を押しして春日社に参詣して宿願である任中納言を祈り、その思いを詠じている。また、「よにしづみて侍けるころ、春日の冬の祭に幣立てけるに、おほえけることをみてぐらに書き付け侍ける」という詞書を持つ

かれはつる藤の末葉のかなしきはただはるのひをた

のむばかりぞ

〔詞花集〕三三八 藤原頭輔

を始め、和歌では枚挙に暇がない。しかし、漢詩文においてはそもそも春日社について述べたものがほとんど現存しておらず、その意味で本詩は極めて珍しいものである。また、この和歌では「はるのひ」、即ち春の日、が春日の神と掛けられているが、このような例も先行する、また同時代の和歌に類例を見出すことが可能である。そのような和歌的な発想による詩が歌人として知られる基良によって詠じられた点も興味深い。基良は『和漢兼作集』に一聯を残しており、和漢兼作であったことはこれまでも知られていたが、ここに、詠詩の状況からしても、表現においても、きわめて和歌的な発想による漢詩一篇が加えられることとなったのである。

また、この詩には詩題の下に「先仙韻」という韻を示す注記があり、翻刻では省略したが、本文一字ごとの右傍には「平」、「他」、「々」の文字が添えられている。冒頭の一句を例として挙げる。

遅々春日社壇邊

これは勿論平仄を示したものである。基良が付したものととも考えられるが、春日社籠門に詩を書き置くという、明らかに他見を予想しての行為にはそぐわないのではな

いだろうか。前の塵巷隱「無題」詩に「上下句同意歟」という、明らかに読者による注が付せられていたこととも考え合わせると、基良の詩を書写した人物によって付せられたものであるろう。それが宗性であるかは不明であるが、詩については初学者であったことが推測される。

おわりに

以上、『遁世述懐抄』所収③藤原基良「春日社壇述懐詩」の三首の「無題」詩、⑦藤原基良「春日社壇述懐詩」の三首の漢詩について簡単な紹介を試みた。⑦を除いては作者も作詩の状況も明らかではなく、内容について推測せざるを得なかった部分もあるが、いくつかの特色は明らかになったのではないかと思う。

まず、⑥「無題」詩に見える『本朝無題詩』との措辞の類似や、⑦「春日社壇述懐詩」の「沈陸」のような異なる語彙の使用といった表現的な面、また、いずれも対句を多用する律詩、排律である―③が二十句、⑥が十二句、⑦が八句―という詩型の点においても三首は平安時代後期以降の漢詩文の特色を豊かに示している。加えて、蟄居中の述懐、身の不遇を春日社に訴えた和歌的な漢詩など、特異な状況下で詠じられた漢詩は、ともすれば類

型的の一言で落着してしまいがちな、この時期の漢詩文に対する印象に、些細ではあるが良い意味での刺激を与えるものだろう。より史料に即した点では、⑦に付せられた平仄を示す「平」「他」という注記は管見のところ他に類例を見ないのであり、僧坊での漢詩受容の様子を示す一史料として注目されるのではないだろうか。

また、これら俗人の詩が青年期の宗性によつて書写されていたという点も重要である。所収文書中、宗性が書写するに到つた経緯を記すのは①と⑦、南都とのゆかりが十分に推測されるものは②と⑧にすぎない（いずれも当時南都に居た人物に宛てた書状である）。残りの四首それぞれがどのような宗性の手に渡つたのかは明らかではないが、従来、官僧としての修学的性格という点から考察されることの多かつた宗性の書写作業に新たな一面を付け加えるものと言ふことが出来る。

註

① 山崎誠「学侶と学問」(『説話の講座』 説話の場―唱導・註釈―一九九二、勉誠社)では、宗性の抄記と彼の参加した寺内論議、公請法会を年ごとにまとめた表が挙げられているが、『遁世述懐抄』は『華嚴宗論議抄』や『春華秋月抄』らとともに「その他の抄」の項に収められている。

る。『遁世述懐抄』を単独で取り上げたものとしては、わずかに阿部泰郎氏が「唱導における説経と説教師―澄憲「釈門秘鑰」をめぐる―」(『伝承文学研究』第四五号、一九九六)の注で「中世に普遍化する『遁世』という人間の在り方」の例として名を挙げておられる程度である。

② 「信阿小考―東大寺図書館蔵『遁世述懐抄』所収漢詩を中心―」(『国語と国文学』第七九巻第四号、二〇〇二―四)

③ 簡単に説明を加えておく。①はかつて興福寺の僧であつた実禅なる人物が家族や師僧に宛てた書状で、新出史料と思われるもの。②は解脱房貞慶が笠置山に隠棲する際に叔父の覚憲に残した有名な書状。『日本思想大系 鎌倉舊佛教』(一九七一、岩波書店)所収「愚迷発心集」収載書目解題において、田中久夫氏により、祐成本「愚迷発心集」別冊、および「習見聴諺集」(実暁記)巻一に同文が収められていることの指摘があるほか、『溪風拾葉集』巻百十一にはほぼ同文(但し、後半に増補が見られる)が載る。④は「保元物語」や「體源抄」にも収められる、妙音院藤原師長が保元の乱の後、配流に際して祖父忠実に送つた書状である。

④ 一九五八年初版発行、臨川書店

⑤ 一九五九年、東大寺図書館

⑥ 「署」は「署」に通じる。ここでは通行の表記に従い「署」に改める。

⑦ 本間洋一「『本朝無題詩』の詩型と脚韻」(『同志社女子大学学術研究年報』第四十四巻IV、一九九二)

⑧ この他、陽明文庫所蔵「兵範記」紙背文書の官職申文（吉田早苗「兵範記」紙背文書にみえる官職申文（上）」（『東京大学史料編纂所報』一三三、一九八八）の翻刻に拠った）中、仁安三年正月付の「明法道請奏」には「李曹之交早旧、拾蚩之勤漸積」という句が見え、ここでも「李曹」が指すのは明法道である。

⑨ 「鎌倉時代の検非違使」（『書陵部紀要』第五一号、一九九九）

⑩ 山崎誠（翻）安居院唱導資料纂輯（二）——国立歴史民俗博物館蔵「筆海要津」翻刻並びに解題」（『調査研究報告』十四、一九九三）がある。今回は写真版を見る機会に恵まれたので、それにより確認した。

⑪ 「本朝新修往生伝」の序に「于時仁平元年臘月一日。朝市隠藤宗友序。」とあるほか、「柱史素為朝市隠 嶺雲莫厭有浮名」（『本朝無題詩』巻八・五三三 藤原敦光「遊長楽寺」）のような例もある。

⑫ 類似した表現に「右九重城南、万年縣裏。築山以擬姑射、貯水以模昆明。蓋是往日經始之離宮、今時筵覽之勝境也。」（『本朝統文粹』巻十二 藤原敦光「鳥羽勝光明院供養願文」）、「なほこの院のけしき有様、山の嵐萬世よばふ聲をつたへ、池の水も千歳の影を澄まして、まちとりて奉り給ひき」（『今鏡』すべらぎ上・初春）などがある。また、「千秋」の「水」、「万歳」の「山」の対は菅原為長の「文鳳抄」巻三「勝地」の項にも「千秋水（万歳山 万歳亭）」とあり、「荊州記」などが典拠として引かれている。

⑬ 「苔地露寒羨怨切、松門日落鶴眼閑」（『本朝無題詩』巻

十・七二八 藤原茂明「山寺即事」）、「山帯斜陽松影薄、水衝乱石谷声余」（『同』巻八・五五二 藤原宗光「秋日長楽寺即事」）など

⑭ 原文「寶」とするが、内容より「養」に訂する。

⑮ 原本「偏」とするが、内容より「偏」に訂する。

⑯ ただし、「籠門」は未見の言葉。中門の楼門を指すか。治承の造替時に現在の形式に改められたとされる中門は、東西に五間ずつの御廊、さらに西御廊が北折した北御廊を持つ。これら御廊では参籠や読経が行われ、時に神との交流が行われる場として捉えられていた。門下もまたそれと同様に認識されていたようで、「春日験記」巻七「経通卿が事」は、藏人頭を辞退させられた経通が建暦二年正月に春日に参籠し、夜は楼門の下で神楽をうたい、笛を吹いたとする。果たしてその後、後鳥羽上皇の夢枕に誰とも知れぬ人物が現れ、何故経通を藏人頭に還補しないのかと上皇を責めたため、経通は藏人頭に還補されたという。経通が藏人頭を止められたこと、建暦二年に還補されたことは史実であり、それが春日社への参籠と楼門での祈りの功德であったと当時みなされていたとすれば、基良の行動に与えた影響を考えることが出来よう。神社廻廊や門が果した祭儀空間としての役割については、松尾恒一「神社廻廊の祭儀と信仰——春日社御廊を中心として」（『園田稔・福原敏男編』『神社史料研究会叢書Ⅲ 祭祀と芸能の文化史』二〇〇三、思文閣出版）を参考とした。

⑰ この年の院最勝講の様子を伝える記事に「道性（尊勝院法眼）」と見える（『明月記』五月三日条）。「東大寺尊勝院

記追加」にはこれに先立つ建暦二年に「花叡之教」を嗜む「一宗之長」として権大僧都、さらにそれ以前には権少僧都を望む道性の奏状が残されているから、この時、道性は尊勝院院主であり、少なくとも権少僧都であった。

⑱ 本詩と年代の近いものでは、「春日遅々已睡眠、碧紗窓裡翠簾前」〔本朝無題詩〕巻四・二〇四 藤原忠通「春日即事」、「春日遅々何賞翫、鳥音花色興相双」〔猪隈関白記紙背詩懷紙〕第四函第二十号(65) 大江周房「春日陪書閣即事(勅)」などがある。

⑲ 実際には平親輔の詩に類出する、と言った方が正確である。〔猪隈関白記紙背詩懷紙〕には六十首あまりの親輔の詩が残されているが、この中に「沈陸」は九例、「陸沈」は五例を数え、他の人物にはほとんどこれらの用例は見られない(作者不明のものに「陸沈」の一例がある)。同詩懷紙は建久七年(一一九六)から元久元年(一二〇四)の作文の記録とされており、親輔も建保三年(一二一五)十二月二十二日に出家している(「公卿補任」同年条)から、本詩にはやや先行するもののは同時代の作と言ってよい。⑳ 「明月記」寛喜三年八月十九日条。なお、この参詣については藤川功和「明月記」の表現―寛喜三年春日社参詣記事を中心に―(「明月記研究」第五号、二〇〇〇)に詳しい。

㉑ 「定春日祭使并從類寄宿寺家近辺領地不可用魚鳥饗饌事」〔本朝統文粹〕巻十一、「春日堂唯識会表白」〔本朝文集〕巻五十八)など数例である。

㉒ 漢詩では大江匡衡の「春日野行」(「江吏部集」巻上)が

「春の日」と春日野を掛けているものとする指摘がある程度である(木戸裕子「江吏部集試注(十一)」『文献探究』四一、二〇〇三)が、和歌では「みかさ山こだかき藤のうらばにはわきてはる日も先やさすらん」(「林葉集」巻六・九五四)、「春日社によみたてまつりける百首歌の中に」という詞書を持つ飛鳥井雅経の長歌「あまのほら ふりさけあおぐ 春の日の 光あまねく てらす世に…」(「新千載和歌集」巻十八・二二三五)などの多くを数える。中でも「堅義の請のぞみける僧の申文のおくにかきつけ」たという「春の日のひかりもしらで露ふかき谷の松こそ年おいにけれ」(「基俊集」二二二)は状況からも本詩に近いものと言える。なお、これらの例を参考にすれば、第七句中の「和光」にも神仏の恩愛に加えて、春日の日の光という意味が重ねられていると考えて良いだろう。

㉓ 「和漢兼作集」巻三・春下に「春曙歴覧」という題による一聯「南澗花紅々躑躅 西湖水碧々瑠璃」が収められている。

(大谷大学任期制助手)

〔付記〕

末筆ながら、貴重な資料の閲覧及び翻刻の掲載をお許し頂いた東大寺図書館に、心より御礼申し上げます。